



地域との交流と触れ合いの場…「縁側」

昔ながらの家には必ずあつて、笑い声が弾んだ

「縁側」の情景は、心と心が触れ合うひととき

現代における、新しい形の「縁側」に集う

【特集】新しい形での地域社会の交流と触れ合い

「縁側」に咲くおしゃべりの花

## 人間関係が希薄化する 現代社会での地域の役割

現代社会は人々の価値観が多様化して、従来、家族や地域、共同体などの習慣や伝統によつてはぐくまれてきた関係性が衰退し、それに伴つて人間関係も希薄化していると言われます。

特に地域社会での関係性の変化は激しく、地域の人々のお互いの支え合いや触れ合いなどが大きく薄れ始めています。それにより、地域社会で守つてきた安全・安心を維持することが、困難になりかねない状況になっています。

現在の地域社会では、暮らしの安心や心の交流を支える取り組みが非常に重要になっています。

## 地域社会の人々の暮らしを支える大切な空間・「縁側」

昔ながらの地域社会において、人々の交流と支え合いのための一番の場所は、「縁側」でした。

隣近所の人々が集まつておしゃべりをしたり、子どもたちが集まつて一緒に遊んだり、お年寄りからいろいろな話を聞いて若い人たちが暮らしに役立てたりと、さまざまな形で心のこもった交流と支え合いの場が「縁側」の役割でした。「縁側」は、家の中であり外であり、日常の生活におけるプライベートなところと地域での

生活の接点となるところの両方の役割を持つ、地域社会での暮らしにおける特別な空間でした。

## 「縁側」で模索する現代の 交流と支え合いの新しい形

現在、地域の誰もがいつでも気軽に集い、支え合う空間の大切さが見直される中で、地域社会における新しい形での「縁側」づくりの取り組みが始まっています。

現代社会における「縁側」の役割は、子どもから高齢者まで、そして、障がいのある人など社会的な弱者もすべて含めて、誰もがいつでも集い、触れ合い、交流することができる空間を意味します。

地域の人々の幅広い交流と触れ合いの中から、お互いに助け合い、支え合う関係の新しい形についてさまざまな試みがなされています。今回の特集では、長年にわたり、

活動を続ける「あゆっこクラブ」の代表を務める緒方祐子さん（上田口区）が、障がいのある子どもたちと地域の高齢者から子どもたちまでが、楽しく集い、優しく触れ合い、心豊かに交流する空間の提供に取り組んでいる活動をご紹介します。従来の「縁側」が持つていた人と人をつなぐ役割を踏まえつつ、新しい形で地域の人々による交流と支え合いを図る、地域の「縁側」づくりです。

地域の触れ合いと交流のために開放されている「あゆっこクラブ」



「あゆっこクラブ」が取り組む、障がいのある子どもたちの日中預かり活動



地域の誰もがいつでも気軽に集える「あゆっこクラブ」の縁側



「あゆっこクラブ」での「縁側」づくり活動の一環として、地域の高齢者が集い、気軽におしゃべりを楽しむ「おしゃべり広場」での小物作りの様子







小物入れなどの制作が一段落したら、テーブルを囲んで楽しくおしゃべりを始めるおばあちゃんたち



【特集】新しい形での地域社会の交流と触れ合い

## 「縁側」に咲くおしゃべりの花

障がいのある子どもたちと、地域の高齢者、そして子どもたち。集い、触れ合うことで、お互いが支え合う。いつも楽しいおしゃべりと、みんなの笑顔の花が咲き誇る優しい空間。

### おばあちゃんたちの笑顔の花が咲く「おしゃべり広場」

月曜日の午前9時30分。田口に  
ある「あゆっこクラブ」の敷地に  
入ると、開かれた玄関の奥から元  
気な笑い声が聞こえてくる。

中をのぞくと、15人ほどの少し  
おしゃれな服を着たおばあちゃん  
たちが、テーブルを囲んで牛乳  
パックの紙を和紙で包んで飾る小  
物入れを制作しているところ。笑  
い声は、うまく形ができずに思わ  
ずこぼれているようだ。

毎週月曜日と水曜日の午前中に  
「クラブ」で楽しく集まって、小  
物入れを作ったり貼り絵を作った  
りして手先を鍛え、一段落すると、  
お茶を飲みながら愉快におしゃべ  
りするのは「おしゃべり広場」に  
集う上田口区のおばあちゃんたち。  
「クラブ」の代表を務める緒方祐  
子さん（同区）が、「クラブ」の



地域の子どもたちが訪れる「マンガ図書館」

取り組みを地域の人々に理解して  
もらうために施設を開放していて、  
その一環として、おばあちゃんた  
ちが集い、気兼ねなくおしゃべり  
できる空間を提供している。

おばあちゃんたちの繰り出す豊  
富な話題の数々は、笑い声に乗っ  
てあふれ出て来る。近所の人の病  
気の状態や孫の保育料の心配、年  
金額から始まり、亡くなった夫の  
話、現在の日本の政治・経済の行  
く末、戦争中の田口の様子、長崎  
の原子爆弾投下の目撃談など、次  
から次へと人生のあらゆることに  
関わる話が飛び出す。どんな話題  
でも、悲しみも辛さも乗り越えて  
きたおばあちゃんたちにとっては、  
笑い話のようなものなのか、部屋  
中に笑い声が広がって、いつの間  
にか次の話題へと移っていく。

「昔の懐かしい話をするのは、  
まるでおとぎ話をしているかのよ  
う」と、ほほ笑んで話すおばあ  
ちゃんたち。お互いを分かり合え  
る者同士で、心置きなく思うこと  
をおしゃべりできる空間は、昔な  
がらの「縁側」そのもの。

### 障がいのある子どもたちを 日中預かる「あゆっこクラブ」

午後4時を過ぎると、「クラブ」  
では、養護学校から戻った障がい  
のある子どもたち5人が過す。

「クラブ」は、町の日中一時支  
援事業を実施している。町内の



建物の外まで笑い声が響く「あゆっこクラブ」

### 地域の子どもたちが集う場所「マンガ図書館」

平日の夕方や、土・日曜日、夏休みなどには、地域の子どもたちが元気なあいさつをして「クラブ」にやって来る。

小・中学校や養護学校に在籍する障がいのある子どもたちを、放課後の間、一時的に預かって保護者のところへ送る。15年にわたり、障がいのある子どもたちとその保護者を支援する活動を続けている。預かっている間に、食事の取り方やトイレの方法なども指導する。「ちゃんと全部食べようね」、「食べたら『ごちそうさま』だよ」とスタッフから子どもたちに声が掛かり、子どもたちはゆっくりながらもそれに応える。「ちよつとでも、子どもたちが何かできるようになる」と、私たちの気持ちは万々歳ですよ」と緒方さんは語る。

### 「クラブ」に集う人々みんなにとつての「縁側」

子どもたちのお目当ては、「クラブ」内にある「マンガ図書館」。本屋から寄贈された漫画や童話、物語、図鑑などが書棚にずらりと並ぶ。子どもたちだけでなく、保護者も童話などを借りに来る。「クラブ」は、乳幼児を子育てするお母さんたちにも開放されている。以前に利用した保護者が、小学校の童話発表大会の前などに本を借りに来ることもしばしば。

平日は、各時間帯での利用のため、ほかの利用者同士で交流することは少ない。しかし、休日や長期休暇などでは、「クラブ」と「おしゃべり広場」で合同でお楽しみ会を開催したり、地域の子どもたちと「おしゃべり広場」と一緒に交流会などのイベントを定期的に開催したり、「クラブ」の子どもたちと地域の子どもたちで交流したりして親ほくを深めている。おばあちゃんたちは子どもたちのことを気に掛け、子どもたちは障がいのある子どもたちを思いやる。障がいのある子どもたちは、スタッフの期待に応えるべく、少しずつがんばる。

「縁側」を訪れるすべての人から、楽しく触れ合う空間を満たすおしゃべりの花が、朗らかに笑顔に乗って輝いている。



おしゃべりが弾んで、おばあちゃんたちの笑顔の花が咲く「おしゃべり広場」。にぎやかなおしゃべり場が盛り上がり、心と心が優しく触れ合う



「広場」に集う高齢者と「クラブ」の子どもたちとの合同による演劇鑑賞会







緒方 祐子さん [上田口区]

おがた・ゆうこ / 町内の小・中学校や養護学校に在籍する障がい児を支援する「あゆっこクラブ」の代表を務める。クラブの施設で、高齢者に交流の場を開放する「おしゃべり広場」や、子どもたちや保護者向けに開放する漫画や本などをそろえた「マンガ図書館」を設けて、地域の「縁側」となる空間を提供。

## 心地良いおしゃべりの輪がはぐくむ

### 地域の「縁側」での心優しい空間

障がいのある子どもたちと  
地域の人々が触れ合う縁側

この「縁側」での取り組みの母体は、もともとは「あゆっこクラブ」での活動が基本にあります。クラブでは、障がい児を日中に一時的に預かる支援事業を行っています。今年で始めてから15年目に

なります。いろいろな施設を借りて活動していましたが、不便を感じていたので、私の家の隣家が売りに出されたのを機に購入し、ここに活動を移しました。

ここで活動するにあたり、障がいのある子どもたちとその支援活動について地域の皆さんに理解していただくと思い、「マンガ図書

館」と「おしゃべり広場」を始めました。

縁側のある風景が作り出す  
地域の暮らしやすい空間

平日は、クラブの子どもたちは、養護施設が終わった後の午後4時  
にしかクラブには帰ってきません。  
そこで、日中は、子育て中のお

誰もが気軽に訪れることができる  
地域の拠点としての「縁側」づくり



県健康福祉部  
健康福祉政策課・参事  
楠田 美佳さん

県では、「地域の縁側」づくりに関する  
活動をする団体などを支援しています

県では、地域の誰もが住み慣れた地域で安心して暮らせるよう新しい地域福祉の創造を目指して、平成16年3月に「県地域福祉支援計画（地域ささえ愛プラン）」を策定しました。その計画の取り組みの一つとして、地域の誰もが気軽に集い、支え合う地域の拠点としての「地域の縁側」づくりに取り組んでいます。

「縁側」づくりとは、高齢化率が進んでいる熊本県の実情を踏まえて、地域の支え合いの希薄化や地域福祉の見直しなどに対する取り組みのキーワードとして、みんなが集い合える場所としての「縁側」をイメージして名付けられました。

この事業は、「縁側」づくりに取り組む団体などが、活動拠点の設置に伴い実施する建物の改修などについて補助金を助成し



母さんたち、特に就学前の乳幼児を育てているお母さんたちに施設を利用していただくこうと考えて「図書館」を始めて開放しました。漫画や童話、物語などの本をそろえていて、地域の子どもたちにも開放しています。

また、私自身が住みやすい老後を過ごすためにどうすればいいかを考えたとき、思い付いたのが「おしゃべり広場」です。

地域の中で、年を取っても誰でもが「お茶を飲みに来たよ」と言っ、いつも寄ってくださるような場所を作りたいと思いました。そのため、逆に皆さんが訪れることができるように、こちらから呼び込もうと思い「おしゃべり広場」を考えました。ある意味では、人様のためではなく、自分の

ためでもあるんですね。

平成18年から、お年寄りの皆さんのために、お楽しみ会を一月おきに開催していました。平成20年12月に、県の「縁側事業」の補助を受けて屋根などを改修しました。

そのときに、「お楽しみ会だけだともったいないから」と声が上がって、平成21年1月に「みんなでおしゃべりをしよう」ということになって、「おしゃべり広場」と名付けて活動を始めました。この「おしゃべり広場」は、月曜日と水曜日の午前中に開催していて、地域のお年寄りの皆さんが15人ほど集まり、小物入れなどを作る手作業をしたり、お茶を飲んでおしゃべりをしたりします。

併せて、月に1回のお楽しみ会も開催して、クリスマス会やひな祭り会などは、地域の子どもたちと合同で開催しています。また、夏休みなどには、クラブの障がいのある子どもたちなどとお年寄りの皆さんで、一緒に観劇会やお楽しみ会も開催しています。

### 縁側を共有することで深まる障がいに対する理解と認識

地域の皆さんはクラブの子どもたちを、最初は「妙な子どもたち」といった好奇心で見られておりました。しかし、直接お楽しみ会などを通してかわり始めると、「やっぱり、子どもだね」とか、「育てて



いるお母さんたちは毎日大変だから、緒方先生たちのクラブの支援活動で助かられているでしょうね」という声も次第に聞かれるようになりました。

クラブの運営は、ある面で、私の生きがいでもあるんです。「子どもたちを何とかしてあげよう」という思いです。ただし、私が子どもたちを見るときは、「子どもたちをどうしよう」ということではなく、「育てているお母さんを、楽させてあげよう」、「リフレックスする時間を作ってあげよう」という視点です。そうすることで、子どもたちにもプラスに働くのではないだろうかと思っています。

私は、地域の皆さんと障がいのある子どもたちが同じ空間の中で過ごすことで、子どもたちがさらし者になるという感覚はまったくありません。ありのままの姿を見

ます。地域の皆さんとの交流手段としてグリーン農業に取り組む場合の経費の助成や、団体の情報交換会の開催、活動の立ち上げや運営に関する相談窓口の設置も行っていきます。現在、県下の約200か所で「縁側」づくり活動に取り組まれています。

### 地域の実情に沿ったアイデアによって取り組みが広がる「地域の縁側」づくり

「縁側」づくりのスタイルは、地域の実情に応じてさまざまです。昔ながらの農家の母屋と納屋を改修して、子育て中のお母さんや高齢者などの触れ合いを図る活動や、「縁側」の拠点にお泊まりの機能をつけて、ショートステイなどの適用がない人や障がいのある人などを急な事情で預ける場所がない場合に預かる活動など、地域の実情に応じたアイデアを絞っていただいています。「縁側」づくりについての当初の想像以上の取り組みをしていただいています。

現在の課題としては、「縁側」づくりの活動は非営利で一生懸命に自主的に取り組まれているので、充実した運用が継続してできるように、県としてどのような支援ができるかを検討しています。これからも、県民の皆さんの身近な空間として「縁側」をさらに活用できるように、活動の輪が広がってほしいと思います。

活動されている方も利用されている方もお互いに生きがいを感じることができ、どちらも幸せを感じることが出来る空間としての「縁側」づくりが充実するように、今後取り組みんでいきたいと考えています。

せて、地域の皆さんが「少しずつでも理解しよう、手助けをしてあげよう」という気持ちを持っていただければと思っています。

## 縁側で過ごす楽しい時間が豊かに咲かせる優しい笑顔

「おしゃべり広場」に参加していただいている皆さんは、最高が88歳で、70歳代後半から70歳くらい

## 生まれ育った地域で生涯を終えられるように介護なども含めた活動ができればいいな



までです。どなたも皆さん、気持ちがお若いです。

いらつしやる皆さんが、この地域で育ち暮らして70歳以上を迎えられているから、お互いのことをなんでもご存知です。「あのときのあのことはああった」とすぐに分かり合える関係です。だから、思い出話に花が咲いて楽しく過ごせるので、皆さんが「また、今日

も行きたいな」という気持ちになつて来ていただけるといいなと思っていませんか。そこが、小規模のグループで活動している面でのいいところだなと思います。

ご家族も、会に参加することを快く思ってください。月曜日になると、ご家族から『おしゃべり会』に行つておいで。おしゃべりしていくから、

おしゃべり会だけでも『おしゃべり会』だろう」と言われるというお話を聞きます。会に参加することで、高齢者の皆さんが笑顔で過ごせる時間を持つことに理解をいただけているのだと思います。

## 幅広く地域に呼び掛けて縁側の触れ合いの輪を拡大

現在運営していて感じているこ

とは、これからは、たくさんの人に「自分がおしゃべりをする会員」というだけでなく、そういう人を支える人になってもらいたいなと思っています。

今からは、さらに認知症などのお年寄りが増えていきます。以前に会に参加されていた方が、認知症が進んでグループホームに入所されました。その後、皆さんがその方のことを心配されていたので、今では「おしゃべり広場」とグループホームとの間での交流も始めています。なぜ交流をはじめたかというところ、そういう人たちのことを何らかの形で頭の中に入れて、みんなで支えていかなければならないと思うからです。

今後は地域などの垣根を取っ払って、たくさんのお年寄りの皆さんに参加していただくことが課題であり目標です。「縁側」の輪を広げていきたいです。

そして、認知症の人なども気持ちよく輪に入っていただけけるシステムも考えていかなければならないと思います。施設に追いやられることなく、生まれ育った地域で生涯を終えられるような、そういう介護も含めた活動ができればいいなと思っています。

80歳までががんばろうと思つていきます。体の続く限り、気持ちがある限り、いろいろな活動に取り組んでいきたいと思つています。

## 本町での「地域の縁側」づくりに取り組む団体や施設などのご紹介

本町において、県が支援する「地域の縁側」づくりに取り組む団体などは、今回ご紹介しました「あゆっこクラブ」ほかに4団体があります。

下田口区（益田信篤区长72世帯）と麻生原区（奥村大助区长50世帯）では、地区公民館を活用して、高齢者から子どもまでの地域の触れ合い活動や交流イベントなどに取り組まれています。

また、岩下の小規模多機能ホーム「桜の丘陵の家」では、施設内の一部を地域に開放してイベント会場などとして活用されており、上早川の小規模多機能型居宅介護施設「ほたる」では、施設内に地域との交流スペースを設けて地域の拠点づくりに取り組まれています。



夏まつりなどのイベントで地域の交流の場となる下田口公民館



交流会や環境美化活動などの拠点として活用されている麻生原公民館